

水稻 斑点米カメムシ類について

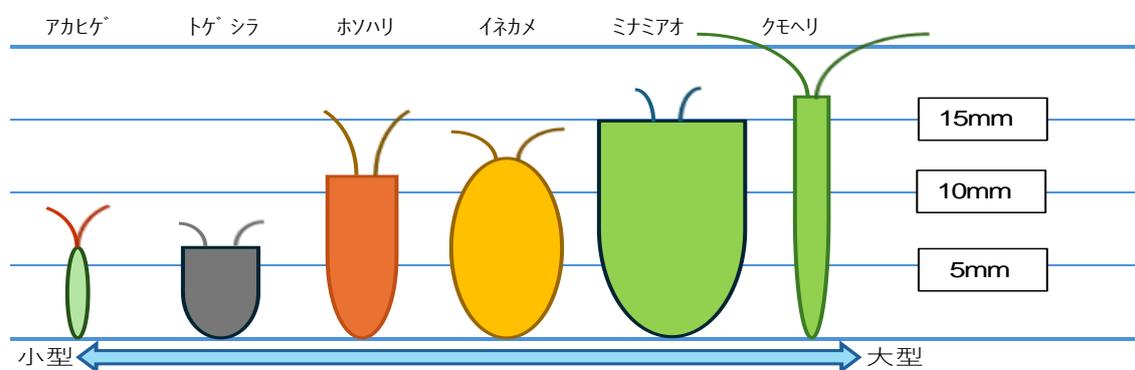


図1 斑点米カメムシ類の種類と大きさ

1 生態

斑点米は、1970年代に始まった米の生産調整以降、品質重視を背景に問題化し、2000年代以降は気象変動等によるカメムシ類の発生量の増加により、最大の害虫被害となった。また2020年代以降は、出穂期の吸汁により不稔を引き起こすイネカメムシによる収量低下も問題となった。

本県における斑点米カメムシは主に、アカシジカスミカメやホソハリカメムシ、クモヘリカメムシとなってきており、年によっては不稔の要因となるイネカメムシも多発することがある。

これらのカメムシは、冬期、日当たりのよい落ち葉下やイネ科雑草の地際、山林等で成虫で越冬するかアカシジカスミカメにおいては牧草茎内で卵越冬する。気温上昇とともに生育、世代交代しつつ水田近くの雑草及び牧草地に移動し、出穂期以降に水田に侵入する。

2 発生状況

【カスミカメ類】

イネ科植物の葉鞘内で卵越冬し春先から成虫が出現する。6月中旬にイネ科植物で繁殖した個体が、4月中下旬植えの早期米の出穂に合わせ集中的に加害するため大きな被害をもたらす。

口針が弱く籾を刺し通す力がないため、開花期～登熟初期の加害が中心となる。

斑点は玄米の頂部、または内・外穎の縫合部に沿った玄米の側面にできる。

【ホソハリカメムシ】

イネ科雑草や針葉樹の樹冠部で成虫越冬し、春先から雑草地に移動して繁殖する。イネの出穂に合わせて水田に飛来し、出穂後の登熟初期～登熟後期まで加害する。

籾全体で口針を刺して吸汁するため、玄米のどこにでも斑点ができる。被害部の色は褐色で、円形～雲形、中央には口針の刺し跡が見られる。

【イネカメムシ】

最大の特徴は、イネのみを加害する。

未だ生態には不明な点が多いが、当所の調査によると、南斜面で直接降雨の当たりにくいジャノヒゲやススキ等の株元で越冬することが多いようである。

越冬世代は7月に入ると、その地域で最も早く出穂の始まった水田に直接飛来し開花期から乳熟期の籾の基部に口針を刺し込み吸汁する。加害された籾は傾穂しにくくなるため被害が目立つ。

その後交尾・産卵し世代交代する。9月下旬頃に越冬地へ向かうと考えられる。



(写真左より、越冬中のイネカメムシ、クモヘリカメムシの吸汁痕、イネカメムシの吸汁痕、不稔による立ち穂)



(写真左は、大型カメムシによる斑点米、右はイネカメムシによる斑点米)

3 防除対策

(1) 除草

斑点米カメムシ類の生息密度を低減させるため、畦畔、農道ぎわ、水路ぎわ、休耕田、および水田周辺などの除草を一斉に行う。特にイネ科雑草は好適な餌植物となるため出穂させないように徹底する。

また、出穂直前および出穂後の除草は、斑点米カメムシ類を水田内に追い込み被害を助長する恐れがあるので出穂10日前までに実施する。水田内のヒエ類等も好適な餌植物なので出穂前に除去する。

(2) 薬剤による防除

斑点米カメムシ類への防除は、穂揃期およびその7～10日後の2回実施する。粒剤による防除は出穂期の7～10日後が基本となるが、カスミカメ類が優占する地域では、出穂期～穂揃期に施用する。ただし、使用する薬剤により防除時期が異なるので注意する。

イネカメムシにおいては、出穂前から飛来し、開花期以降に集中して加害するため防除時期が早く、散布剤では出穂期前後、粒剤では出穂期の5～10日前が防除適期となる。